高校・岡山県知事賞

「伝承」するのは、私たち

笠岡市・笠岡高２年　山下　瑠南

胎内被爆者―。私が今まで新聞記事で目にし、話を聞いた被爆者は、自身の目を通して爆弾の威力を知り、肌を通じてその苦しみや痛みを感じてきた人たちだった。しかし、実際には生まれてきたその瞬間から被爆者であるという宿命を背負ってきた人たちもいるのだということを、私は初めて知った。

八月五日にこの胎内被爆者の集会が行われた。彼らはこの集会で「被爆者」として、同じような思いをする人が二度と出ないように、被爆者がどう生きたかを後世に伝えなければならないと強調した。何も見ず、体験したこともないのに、後遺症という苦しみだけを味わって生きてきた彼らは、戦争の恐ろしさ、怖さ、辛さを伝承しようと努力している。

私は中学二年生の時、関東から広島へ引っ越した。広島は原爆ドームのイメージがあったが、私自身は戦争や原爆についての知識がほとんど無く、興味を持ったことも無かった。しかし広島の中学校では原爆について知り、考える時間が多くあった。八月が近づくと記念碑の前に捧げる折り鶴を折った。被爆者の方のお話会も開かれた。私はそこで広島の、戦争と平和に対する意識の高さに驚いた。そして自分が被爆国の国民としてどれほど意識が低かったかを痛感した。同時に、地域によって戦争に対する意識の違いがあること、その差が大きすぎることに問題意識を抱いた。戦争の悲惨な記憶、被爆者の思いと平和への願いは誰もが知っておかなければならないこと、忘れてはならないことなのに、と。

近年、「伝承」の重要性が強く謳われるようになった。第二次世界大戦を経験した人の数が毎年減っているからだ。世界平和の実現が望まれている昨今、彼らの思いを後世に伝えていかねばならないのは当然のことだ。戦争だけではない。地球温暖化によって未曾有の災害が毎年起こる今日では、それらを伝承していくことも必要だ。東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨、房総半島台風。私たちの命や生活を守るために「伝承」すべきことはたくさんある。そして伝承者は経験者だけ、大人だけ、高齢者だけでいいのか。いや未来を担う私たちこそが、伝承するための知識や経験が必要なのではないか。八月六日の朝に手を合わせて死者を想うだけでも、ネットニュースでちょっとした記事を読むだけでも、少しでも私たちの関心が戦争や災害に向くようになればいい。まずは知ることから始める。それが私たちがするべき第一歩だ。

2021年8月6日付　中国新聞

寸評　広島で戦争や原爆を学んだ経験から、「伝承」する担い手は当事者だけであってはならず、自分たちのような若い世代こそが担うべきという強い意志が表現されています。

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。